

「場の理論と日本語の文法現象」

本ワークショップは、場の理論に基づいた言語学の構築を目指し、特に日本語の文法現象が、従来の言語学理論よりも場の理論からうまく説明できることを例証するのを目的とする。

日本語の文法・談話については、欧米の言語とは異なる構造が存在すると指摘されている。また、欧米のポライトネスの考え方では、日本の敬語や待遇表現を理解することはできず、これと異なる「わきまえ」（井出 2006）という考え方が必要であることが明らかにされてきた。その背景には、日本の文化の基底にある「場」を重視する考え方（城戸 2003、清水 2003）があり、その場というものがある日本語の文法や談話の構造に大きな影響を与えていると考えられる。場があることにより、状況やコンテキストに依存しなくても、主語を明示しないまま意思疎通に支障がないため、日常的に主語のない談話が交わされる。この場と日本語の文法及び談話との関係性をより具体的、実証的なデータに基づいて解明することによって、場の理論がより具体化され、例証されると考える。

発表者 A は、「場の理論と言語類型論」と題して、場の言語学の観点から対格言語と能格言語の類型に関して考察する。能格言語は、出来事中心のナル型言語であることが言われている（池上 1981）。本発表では、能格は、具格あるいは原因格が起源（近藤 2005）であり、それは元来場所性を持ったものである可能性を示す（「風で、窓が開く」）また、生成文法などの自動詞の分類として「非能格動詞」「非対格動詞」が言われるが、その用語自体、対格言語から見た（転倒した）不適切な用語であり、場所的観点から「能動詞」「所動詞」（三上 1953）という類型を精緻化させることを提案する。

発表者 B は、「直示用法の指示詞・人称詞にみる日英の「場認識」の違い」と題して、日本語と英語の「場認識」の違いを直示用法の指示詞と人称詞を日英対照して論じる。英語話者は指示対象を発話の現場の物理的空間に位置づけるのではなく、脱現場化（抽象化）してとらえる。また、1人称代名詞（I）や2人称代名詞（YOU）は、現場から転位した談話上の抽象的「話し手」「聞き手」という認知を表す。対象も人も抽象化してとらえる英語話者の認識の基盤は発話の現場ではなく抽象的「談話の場」にある。対照的に現場依存が極めて強い日本語は認識の基盤を「発話の現場」に置く。日本語話者は、対象を現場の物理的空間に位置づけてとらえ、また、話し手、聞き手も同じ現場に位置づけ、「話し手のなわばり」「聞き手のなわばり」を認識する。「話し手」と「聞き手」は抽象的対話者ではなく、現場の具体的関わりを持つ対話者となり、それは日本語の多様な待遇表現に結びつく。

発表者 C は、「言語獲得にみられる事態把握と場の言語学」と題して、3～5 歳児の言語データは、その言語において典型的な事態把握を示していることを提示し、場の言語学が言語獲得理論について与える示唆について論じる。具体的には、因果関係を示す出来事について、英語では、動作主が被動作主に働きかけて変化を与えるという視点を反映した言

い回しが使われており、一方、日本語では、動作主、被動作主について言及することなしに、因果関係にはこだわらず事態をまるごと成立するものとしてとらえている視点を反映した言い回しが使われていることを取り上げる。本発表では、言語によって異なる事態把握が言語獲得の初期段階にみられることを示すことにより、場の言語学の考え方によってその相違が説明可能になることを論じたい。

発表者 D は、「存在スキーマを基本とした日本語の自他交替の分析—場所の焦点化はどのような構文と意味を創り出すか」と題して、存在スキーマを基本とし、存在原因として出現・移動・使役などがそこに読み込まれたイベントスキーマを想定し、参加者の存在する「場所」を組みこんだ認知モデルを提案する。そこでは〈存在〉と〈所有〉の概念のつながりが注目される。参加者中心主義の見方では主客分離がベースとなるため、〈所有〉は他動性の低下したものであり、二者の非対称性のみが残る拡張事例として処理される。一方、存在スキーマを基本とした分析では、〈所有〉は地として機能していた場が焦点化され、際立ちを与えられ図として機能することで生まれる場所と参加者の関係であると定義される。つまり、主客が一体となる〈存在〉と〈所有〉という概念が「場所の理論」(岡 2013)の鍵になると考えるのである。これによって非意図的な事象を表す他動詞文(「その仕事は危険を伴う」など)、有対自動詞の両用動詞化(「人が席をかわる」など)の意味を統一的に説明できると考える。

発表者 E は、「日本語の文法・談話における場の理論」と題して、本ワークショップの発表を総括し、場の理論の大きな枠組みから日本語の文法・談話現象を位置づける。

主要参考文献

- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店。
井出祥子 (2006) 『わきまへの語用論』大修館書店。
岡 智之 (2013) 『場所の言語学』ひつじ書房。
城戸雪照 (2003) 『場所の哲学—存在と場所』文芸社。
近藤健二 (2005) 『言語類型の起源と系譜』松柏社。
清水 博 (2003) 『場の思想』東京大学出版会。
三上 章 (1953) 『現代語法序説—シンタクスの試み』くろしお出版。